日本の《しるし》

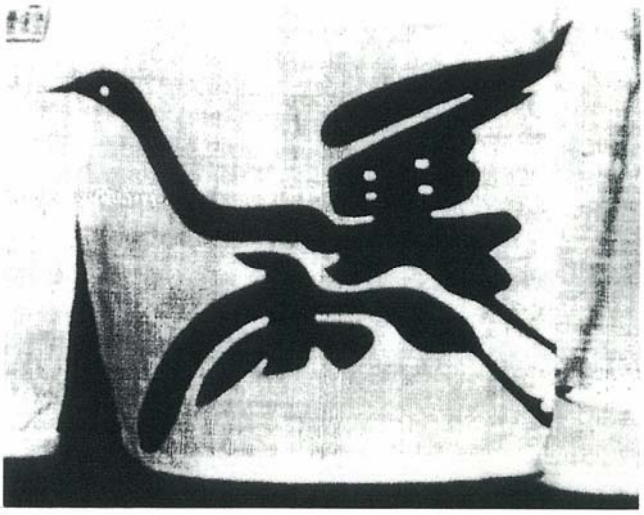
―― 継承されたシンボルに民俗の美を探る ――

北　端　信　彦

1．はじめに

ヒトは情報の80%を視覚によって得ているといわれている。それゆえか、《しるし》をコミュニケーションの手段として我々の先祖が持つにいたったのは文字よりも古い時代のことであった。

今、日常生活のなかに《しるし》を探れば、学校には校章、市町村にはそれぞれの章、神社や仏閣にも共通の、あるいは固有のしるしがある。そして我々が最も身近に、目にするのが、事業体のマーク類である。その組織の大中小・零細を問わず、事業体が営業の過程において《しるし》の類を持ち、使用するのはそこに他者(社)との差別化とイメージの醸成・構築という必然性があるからに他ならない。



〈魚市〉の暖簾　京都市東山区今熊野

ここでは日本の中世から現代にいたる商家を中心に種々の職業で用いられ、今日にも連綿と受継がれ使用されてきた《しるし》、すなわち、シンボルやトレードマーク等のうち、欧米風の近代的なデザイン思想の影響を受けない明治期以前のもの、また明治以後に採用されたものでも、古い伝統を伝えているものに焦点を絞り、ヴィジュアルデザインの立場から分類して、その特質を解明しようとするものである。

2．今日的意義

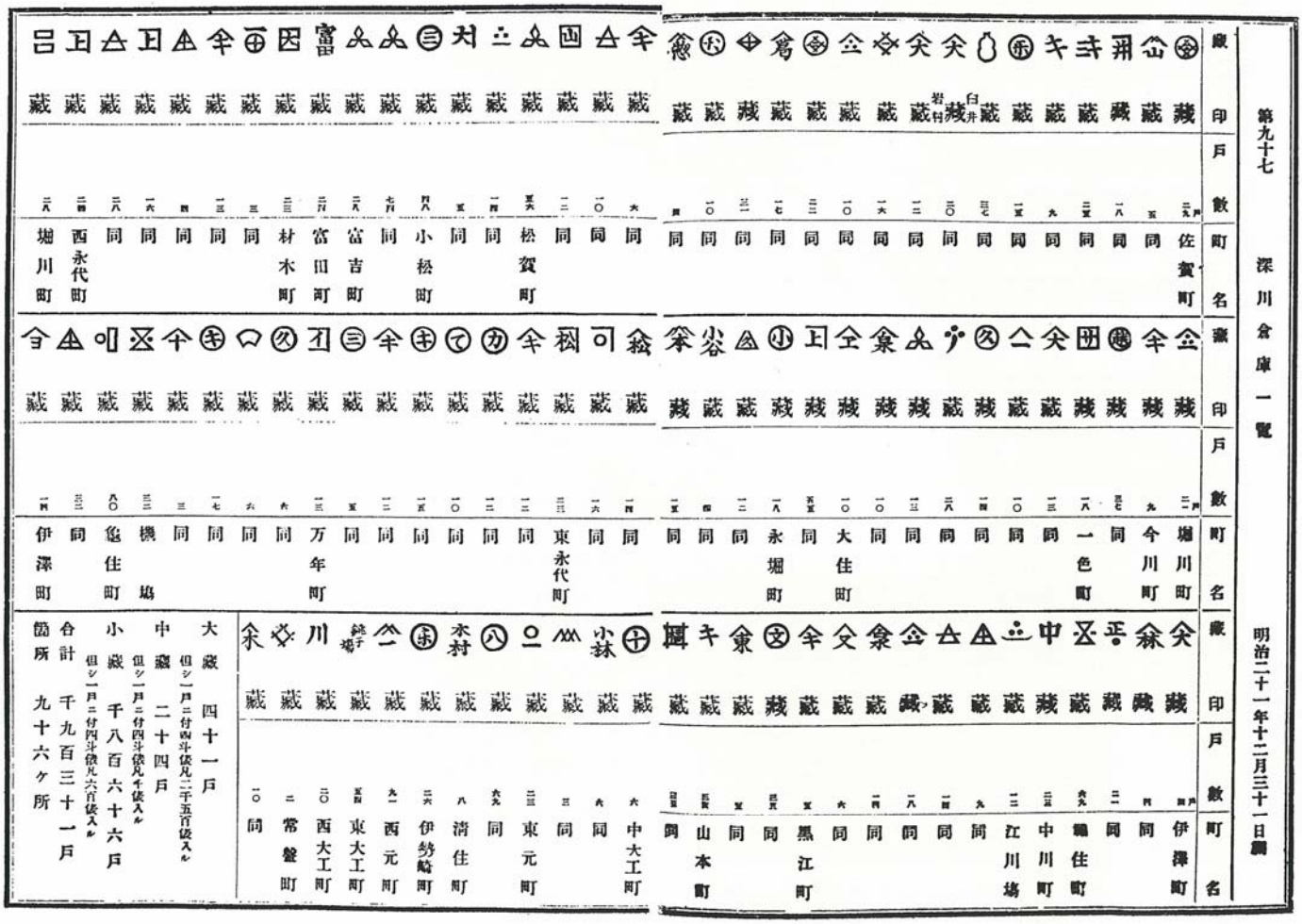
この領域はごく一部を除いて、これまで、ほとんど学問的研究や、資料の収集がなされることのなかった分野である。したがって、理論的な本質解明よりも、まず未開発資料の発見と、歴史のうねりに埋没しがちな、資料の渉猟と収集に時間の多くを割くべきと考え、各地へのフィールドワークに力を注いだ。

一応の成果というにはまだまだ不十分であるが、C.I.（コーポレート・アイデンティティ）研究の中で考察するようになってから10数年、直接、研究の対象としては3年の果実である。

日本の商家の家印や商標をみた場合、例えば室町・江戸初期の紋章や暖簾にみる《しるし》等には、けっこう複雑な絵模様のデザインが多いのに対し、江戸も中期を過ぎると次第に単純化されたものになってくる。このことは重要な意味を持つのであって、それは原始的な単純性ではなく、高い造形性を持ち、複雑の極まった単純性、洗練された単純性であることである。複雑なカタチのものや、装飾性、趣味性の強いものは、識別性において単純なカタチのものに劣るからであろう。

見た瞬間に誰（人・家・屋）のものかが分る識別性。

近くはもとより、遠方からもはっきりしていること。ヒトが替って使われてもカタチが崩れないこと、また、多少の崩れは大勢に影響を及ぼさないこと。描き易く憶え易いこと等、商標としての《しるし》に求められたいくつかの条件は、今日のトレードマークのデザインに求められる条件に、そのまま重ねることができるのである。それはとりもなおさず、時代が下るにつれ、商業、流通の形態が、今日により近づいていたことを表している。当時既に手描き友禅等の繊細優雅な染物がありながら、そのような美を認めつつ、他方で、紺地の暖簾に《しるし》として家紋を白く抜いたものを機能の美として認めていたことは、町人の民度の高さと、デザインマインド



深川倉庫一覧表（高橋正人『日本のしるし』岩崎美術社より）

の嵩さを示すものである。

それらの《しるし》はそれではいったいどういうステージが与えられたのであろうか。

ここでは商業に限定しているが、古いものでは、蔵、看板、すでにみた暖簾、他に提灯及び提灯箱、半纏、風呂敷、手拭い等の販売促進に関するもの、直接、商品として、樽、せいろう等、包装に類するもの、袋類、帳簿類、引札・貼札類等、また業種別に個々にみていけば、その業界ならではのモノにつけられて、それぞれのはたらきをしているのをみることができる。今日では印刷媒体に加えて電波媒体がそのステージを広げつつある。

3．分類および解説

分類は《しるし》を構成している要素によって次のように分けた。

①主に漢字一文字を○で囲んだもの

②主に漢字一文字を〈ヤマガタ〉もしくは〈サシガネ〉と組合せたもの

③漢字、ひらがな、カタカナ等一文字を〈キッコー〉

〈ヒシ〉〈イゲタ〉〈カン〉やその他で囲んだもので②を除くもの。

④絵が主な構成要素となっているもの

⑤上記①②③④のいずれにも属さず、《しるし》そのものといえるもの

⑥文字単独で《しるし》とし、他の要素を加えないもの

⑦家紋をそのまま《しるし》として用いるもの、等である。

①には、○が一重のもの（図１～８）、子持ちケイよろしく二重になっているもの（図９、10）、またヒゲ文字にマッチさせるため、筆の入れ始めと終りの部位に筆の名残をとどめているもの等がある（図11～14）。

○の太さをどうするか、ということはデザイン上かなり重要なことであるが、《輪紋》の〈中太輪〉か〈丸輪〉クラスが多く用いられ、図６、７、８のような〈細輪〉から〈糸輪〉クラスのものはごく限られている。中でも図８は〝梅〟の文字の黒さと、囲んだ輪の細さのコントラストにセンスの良さをみることができる。

図７の○の中の文字は〝竹〟の字の篆書体である。先

端を丸めて丸ゴシックの感はあるものの、直線のみで構成されたそれは、意外にモダンである。

ここで選ばれたそれぞれの文字一字は何に依拠するのであろうか。図2《髙島屋》の高や、図6《さぬき麺業》のさ、図7《竹尾》の竹等は理解し易いが、中には屋号と文字に関係がどうあるのか理解しにくいものもある。図1《小山園》の久や図5《後藤組》の公の字等である。

先行の同業他社に同じ姓名のそれがあった場合、姓を他店にゆずり名の方の字を〇で囲んで《しるし》とするのは考えられることである。次の分類中に《忠兵衛》が忠の字を梅の花で囲んで《しるし》としていること等からも無理なく導ける。筆者は芸大勤務の日、出勤簿に印鑑を押しながら、他の教員方のサインを興味を持って拝見している。印鑑を押されない先生方は姓の二字を〇で囲んで印鑑の代用とされているのが圧倒的に多い。北端のような場合、北を〇で囲むか、アルファベットのKを〇で囲む方法をとっているヒトもいる。ここに《しるし》の発生の原点があるとみることができるのではなかろうか。

次に〈ヤマガタ〉と〈サシガネ〉と文字を組合せた分類に入る。

ひとくちに〈ヤマガタ〉といっても、よく見ると、6通りの〈ヤマガタ〉がある。最もシンプルな、屋根状のもの(図15～17)。屋根の頂上の部位が父の字に似て外側に出ている〈デヤマガタ〉(図18、19)。また反対に屋根の内側に折返しているもの〈イリヤマガタ〉(図20～22)である。

他に図23は〈チガイヤマガタ〉の中をカットしたものと思われ、他に〈ハナヤマガタ〉というのがある。

またヤマガタに曲線と太細の要素が加わるとその呼称は〈フジ〉と変る(図24、25)。日本一の商店にとの願いが込められているのであろうか。

〈サシガネ(時に略してカネ)〉の方は採用している事業体が大工、あるいは建設業に関係があるかというと、少なくとも今日の時点では関係がないようである。業種は多岐にわたるが、漢字を用いたものより、意外にカナが多い。〈サシガネ〉が〝差し金〟であり、大工道具の直角に曲がった金属性のものさしであることを知らない世代が増えてきているが、今も使用例は多い。

続いて三つめの漢字、ひらがな、カタカナ等一文字を色々なカタチが囲んだものをみる。

いずれも文字を中心に置いている以外は多様な要素で囲んでいるので一概にはいいにくい《しるし》類である。

図31、32の二つはいずれも家紋がらみの《しるし》である。《キッコーマン》のキッコーは〈亀甲〉である。平安末期から鎌倉初期にかけて流行したとされる服飾文様で、家紋の一つである。図32の百貨店《そごう》の三角形を向い合せたようなカタチは数字の五であるか、家紋の〈丸に中かげ輪鼓〉のいずれかである。文字紋はいずれも縁起・吉兆・信仰・勝利祈念等の意味で形象化された。《そごう》の場合は、創業時五つの業体が一社に合併されたものか、創業者の家紋であったかのどちらかであろう。

図33の《ヒゲ田》は屋根様のカタチを〈ヤマガタ〉といわず、〈ヒゲ〉といっているのがおもしろい。田の字の四コーナーに加えられた両端の尖った針状のカタチは何を表すかは不明だが、上部〈ヒゲ〉の勾配にうまくおさまりがつけられている。

図35の《おきな昆布》には先にみた〈フジ〉がついている。〈フジ〉の傘下にただ翁の文字を置くのではなく、角を丸めた矩形に納め、なおも白黒を反転した凝った処理である。

図37、38は囲みのエレメントに〈カン〉が用いられている。〈カン〉は外来の古典的なカタチの唐草に似ているが、唐草ではなく、タンスの鐶である。

図39、40は〈イヅツ〉と〈イゲタ〉、図42は〈ミツヨセブンドウ〉の崩し、図43は〈イトマキ〉、図45は〈ツヅミ〉をそれぞれうまく使いこなしている。

図46の忠の字を囲んでいるのは明らかに梅の花、図47もただの〇ではなく、かすかに五つふくらませて花びらのニュアンスをもたせている。図48の《喜八州》は三文字を囲むのに〈シメナワ〉を用いた堂々たる《しるし》である。注連縄と書き一種の結界でもある。神前などに掛け渡して神聖な場所とその外との境界を示し、けがれの入るのを禁じるための小道具である。しかし、《しるし》に用いるのは非常に珍しく、そのルーツが交尾状態のへ

ビを形象化したものであると聞けば、採用者ははたして納得して採用したであろうか。

４つめの分類〈絵〉をモティーフとしたものに入る。

図49の《松本》は京呉服の老舗である。店頭の日よけ暖簾のこげ茶地に白く抜かれたそれは見事であった。姓の松本が松の枝のイラストになっている。松枝のカタチより、本の字を読ませて絵にもなっているところがミソ。よほど柔軟な発想とセンスがなければこうはいかない。次の図50《笹屋伊織》も姓の笹の字が鶴になっていて興味を魅かれるが、アソビ心というか、シャレッ気が利いたものである。

図51も家紋の〈丸に篠つき切竹笹〉に似るが、影のつけかたと下部の節の表現が異る。

図52の《小布施堂》も家紋風のまとめかたをしているが、家紋にはないオリジナルの三つの栗がかわいい。〈クリ〉紋は戦国武将の出陣式における勝栗のように、縁起・吉兆・勝利祈念と結びつき易いのだが、家紋の数は意外に少なく、筆者の手許の図鑑には二紋しか載っていない。

図53の《千總》はいかにも京呉服の老舗らしい《しるし》である。三つの箱のようにみえるカタチは〈チギリ〉で字は**縢**と書く。**縢**はH字の、タテ糸を巻きつける機織り道具、または木や石を接続する建築工具である。契のごとく強く永くという意味を込めてあるようだが、それに花模様を加えることにより、呉服のらしさをも表現でき、明るく華やいだ雰囲気になっている。

図54は本来は火消し装束なのだが、消防士の服装と解するヒトは少なく、いわゆる〈赤穂浪士〉を思いだす。店主も、勿論、それをみこしての採用であろう。

図57は扱う商品が豆であるからそれに鳩を加えてシンメトリーにまとめたらこうなったというべきか。雰囲気が日本的ではない。

図58は魚料理が自慢の民宿の《しるし》である。魚のウロコが東の文字になっていて、《と卜屋》という。かなり凝った表現である。

図59、年配の者にはある種の懐しさを覚えるが、〝保健産業〟に対応できているかどうか。製品は〝仁丹〟だけではなくなっているのである。

図60はとんかつレストランの《しるし》。これで豚に見えるから不思議である。

次に上記にみた①②③④のいずれにも属さない《しるし》そのものといえるものをみる。

図61はよく知られた清酒の《剣菱》である。〈ケンビシ〉のカタチは時代とともにいくぶん新陳代謝しているが、我が国の《しるし》中、最も美しいカタチのひとつであろう。両刃の剣と〈反り菱〉を組合せたカタチは、描くにあたり径の種類は案外少なく、簡単に求められる。オリジナルを手掛けた無名のデザイナーに讃辞を送りたい。

30数年前、筆者がまだデザイン学生の頃、JR環状線・桃谷駅付近で窓外に見えた、酒店の看板の〈ケンビシ〉を今でも鮮明に思い出すことができる。

図62の《津の清》、本店は大阪市南区ニッ井戸にあるが、おそらく、地名から発想してデザインされた《しるし》であろう。四角形は日本の家紋では、〈イシ〉か〈イド〉か〈クギヌキ〉を表すが、家紋中に〈フタツイド〉というのはない。

図63の《梅屋常三郎》は家紋らしくまとめられているが家紋図鑑には見当らないものである。全体に細身のラインで構成されているが、それが梅花の白を表現するのに成功している美しい《しるし》である。

図64は《つるつる庵》、お食事処である。つるの繰返しは麺類を、そして〝つる〟はもちろん鶴でもある。

次の図65、66は共に〈ツル〉をモティーフに選んでいる。家紋にみられる〈ツル〉はすべて鶴のヨコ向きのものであり、このように正面を向いたのは一紋もない。図65の《寿屋》は扱う商品が結納品であることから、めでたい鳥としての鶴が選ばれたのであり、一方和菓子の《鶴屋八幡》は屋号から選ばれている。

図67は家紋からアレンジしたものである。中輪に正方形９コは家紋の〈つなぎ平九つ石〉である。幾何学的なカタチは家紋らしさが比較的うすく、その分、現代的である。

図68のヨコ三体の矩形は〈三国〉の三を、上部の三角形は庵の屋根、全体で〈三国庵〉ということであろう。

図69、京料理店の《しるし》である。真ん中の円に替えて〈ハナ〉を持ってくれば〈相馬亀甲〉として家紋にあるが、亀甲に丸を入れたものはなく（丸は星か餅を表

す)、京料理店のしるしとしてはいかがなものかという面はあるが、視覚的には強いカタチである。

図70、お菓子司の《しるし》である。〈カキ〉紋もたいへん少なく筆者の手許の図鑑には二紋があるのみで、それも花と葉をデザイン化したものであり、果実を家紋としたものは一紋もないから、比較的新しいオリジナルである。和菓子そのものをも連想させるかわいいカタチになっている。

図71はお菓子司の《しるし》であるが、家紋中にもなく、手掛りの全くない不思議なカタチである。キの字が10個であろうか。

図72は屋号どおり、ずばり〈だるま〉。顔のあたり、線がややるさい。

次に構成要素が文字のみとして分類したものをみる。

他の要素を加えないで文字のみというのは意外に少ない。

図73は印鑑等によく使われる篆書体である。

蕎麦の漢字が読めなくても、使われている媒体が暖簾だけであり、店頭入口付近に商品のサンプルがあれば、難はない。

図74、ずばり《野半の野》の〈の〉である。近年の作であるが、デザインの心は日本的である、とみてとりあげた。赤地に白ヌキの文字が印象的な暖簾であった。

図75は文化年間（1804～18）創業の京都東山区にある料亭の老舗。これも篆書体である。

図77はやや細身のストロークであるが、強くて見事な《しるし》である。〝ひげ文字〟の様式美に埋没せず、独自なものを創りあげた。

図78の《太政》は特に名称のつけられた書体ではないが、勧亭流や寄席文字、また、ヒゲ文字でもない、筆書きの文字を極端に太くして、ある程度様式化したものである。字数が多くなると煩わしくなるが、二文字程度だと力強く頼もしい感じがする。

図79は染織屋の《しるし》であるが、円内にひらがな三文字程度を、小さく波打たせて納めるスタイルのものは他にも《ちもと》（祇園のお茶屋）等に散見される。この〈ひぶや〉は比較的判り易いが、先の〈ちもと〉のとは登の字になっているなど、判りづらかった。

心という字はもともと心臓のカタチからきているといわれるが、図80《玉の家》の心も心臓のカタチに似ている。ほぼシンメトリーのカタチはネガポジの分量もよく、バランスはとれている。が少々気持が悪い。

図81は《鴻池組》のしるしである。北の字を比較的無理なく円に納めている。末端を細くしてアタマが重くならないように配慮されている。北の字はもともとがシンメトリーに近いのがさいわいしている。

最後に家紋を《しるし》としている諸職をとりあげる。

4．紋章としるし

日本には諸外国には類例のみない、家紋（定紋・紋章ともいう）がある。その数、ヴァリエーションも含めて約15,000ともいわれ、天皇家から市民の各家庭まで、一家に一紋ずつそれをもっていて、墓碑や冠婚葬祭など折にふれて使用されている。

したがって、そのような家紋が、商家の《しるし》として使用されるのはごく自然なことである。筆者が無作為に収集した《しるし》ではここまでみた分類中、もっとも数多いのがこの家紋を《しるし》とするものであった。

日本の家紋がいつ頃芽ばえ、どのような過程を経て今日のようなものに形成され、定着したのかは一様ではないが、古いものの多くは、平安期の文様に原型をみるのが一般的である。その文様は王朝貴族が乗用した牛車に描かれ、衣服に染織された。この期のモティーフは植物が多いが、まだ、洗練されたものは少ない。

一方武家紋の場合は、初めは旗印や陣幕に用いた《しるし》であった文様から家紋に発展した過程を経ている。平安期の有名な源平の戦いでは、白・赤の旗で彼我を識別したにすぎない。旗印の素朴なカタチから、植物、動物、器財、天文、地理をモティーフにした家紋が登場したのは鎌倉中期以後とされている。

南北朝の争乱を経て、戦国期の武将が割拠する時代は同族・党の分裂と分派を促進し、同族求心のシンボルであった家紋は、やがて、家、個人を表す家紋へと進展する。

また一方で、家紋は戦場での自己の勲功をアッピール、

デモンストレーションするためにも使用された。やがて徳川が天下を取ってその機能は役割を終えるが、江戸幕藩体制のもとで家紋は、武家社会の職階制と家格を表す新たなシンボルへと移行する。

公式の場における礼服・裃（かみしも）の制度化は、家紋の大きさ・位置も規定されたため、視覚的なバランスを整える必要から輪廓が付加された。

この、カタチを円内に納めるというデザイン上の方法は択抜なアイデアであって、その後の子女の化粧道具や日常生活の小物にまで応用するにあたり、扱いに頗る柔軟性を与えている。○、すなわち方向性をもたぬこのカタチは、単独で、あるいはタテにも、ヨコにも、また左右対称にも、幅広く他の要素を受け容れるのである。例として採り挙げたものの多数にも、それを伺い知ることができる。

他方、家紋が商家・諸織の《しるし》として多く使用された背景には、沈滞ムードの武家階級とは対照的に、経済力を蓄積した町人階級の台頭がある。わけても商人階級は富の力で歌舞伎芸能と逢着し、江戸趣味が形成される。それまで専ら武家のものであった家紋が町人達の羽織紋付に染め抜かれるようになったのはこの頃である。家紋のデザインは洗練され、伊達紋・比翼紋・覗紋・崩紋などのスタイルとして町人の気質と矜持を表現したもので、武家紋のもつ硬さ冷たさとは対照的に、自由人のもつ粋と派手が象徴的に表現されている。光琳紋にその頂点をみることができる。

家紋のモティーフは植物がもっとも多く、全体の中の45％を占める。２番目に器財の21％が続く（伊藤幸作編『日本の紋章』ダヴィッド社)。

西洋の紋章は王侯貴族にしかなく、またモティーフもワシ・タカ類やライオン等に限られ、想像上の動物でもドラゴンのように、弱肉強食の世界で強さを誇るものが多い。それと対照的に我が国の天皇家は菊花紋であり、戦国の覇者であった徳川家でさえ、一族は葵紋である。このことは様ざまな角度から興味深い。

以上、家紋については図版を多くしたので頁数の関係から総論的に述べ、各個についての解説をひかえた。

５．おわりに

商業の世界で《しるし》、今日のいい方でのトレードマーク、シンボルマークに課せられた責任は重い。事業体の視覚によるイメージ形成度がますます高くなっているなかで、時によっては、それは事業体の浮沈にかかわるのである。

ところが、デザイナー向けの、新しくつくられたマークやロゴタイプ、および世界中の優れたそれらを集めた書籍は数多く出版されることはあっても、我が国固有のマークやシンボルの古いものを研究しようとするヒトや、出版物は極めて少ない。参考文献に挙げた高橋正人氏の労作『日本のしるし』４部作をわずかに知るのみである。それらを契機にテーマを得てアプローチを試みたのであるが、まだまだ不十分である。大方の批判を得て次へのステップとしたい。

なお掲載図版中タテに亀裂があるものは、版を得た暖簾の布地の割れ目であり、精度を欠くものも散見されるが、原図を尊重して、手を加えるのを最少限度にしたためである。

この研究は塚本学院教育研究補助費、’95’96’97年度の助成を受けてなされたものである。

●参考文献

『日本のしるし』１．家のしるし
２．諸業種家じるし
３．商品・業種のしるし
４．火消・船・講・まじないの印
高橋正人　岩崎美術社
『暖簾』 増田正　グラフィック社
『日本の紋章』 伊藤幸作編　ダヴィッド社
『別冊・太陽　豪商百人』 宮本又次他選　平凡社
『日本屋外広告史』 谷峯藏　岩崎美術社

①抹茶〈小山園〉京都府宇治市小倉町
②百貨店〈髙島屋〉大阪市中央区難波
③百貨店〈MITSUKOSHI〉大阪市中央区高麗橋
④醤油〈日本丸天〉兵庫県揖保川町半田
⑤建設・家屋移転〈後藤組〉静岡県下田市西本郷
⑥さぬきうどん〈さぬき麺業〉神戸市中央区三宮
⑦洋紙〈竹尾〉東京都千代田区神田
⑧のり〈山本海苔〉東京都中央区日本橋室町
⑨醤油〈マルキン〉香川県小豆郡内海町
⑩醤油〈上日醸造〉秋田県角館市
⑪醤油・金山寺味噌〈丸新〉和歌山県有田郡湯浅町
⑫天ぷら〈あげ天〉滋賀県伊香郡賤ヶ岳S. A.
⑬料亭〈暮六つ〉東京都台東区浅草
⑭製紙〈丸住製紙〉愛媛県川之江市川之江町
⑮醤油〈小原久吉商店〉和歌山県有田郡湯浅町
⑯醤油〈大のや〉岐阜県高山市上三之町
⑰醤油〈ヤマサ〉千葉県銚子市新生町
⑱佃煮〈川上商店〉兵庫県神戸市北区有野町
⑲会津漆器〈鈴善〉福島県会津若松市中央
⑳西陣織〈加納〉京都市上京区上立売通
㉑西陣織〈多津美〉京都市上京区中筋通
㉒鰹節・調味料〈ヤマキ〉愛媛県伊予市米湊
㉓みやげもの〈山味屋〉岐阜県高山市上一之町
㉔味付のり〈菊屋〉兵庫県神戸市神戸大丸前
㉕醤油〈フジヤ〉和歌山県有田郡湯浅町
㉖乾物卸〈カネナカ〉和歌山県海南市日方
㉗海産物卸〈出口商店〉兵庫県洲本市本町
㉘おこしあめ〈俵屋〉石川県金沢市橋町
㉙洋紙〈田村洋紙店〉東京都千代田区神田
㉚鰹節〈にんべん〉東京都中央区日本橋

㉛醤油・食料品〈キッコーマン〉千葉県野田市野田
㉜百貨店〈そごう〉大阪市中央区心斎橋
㉝醤油〈ヒゲタ〉千葉県銚子市新生町
㉞醤油〈にしこ〉和歌山県有田郡湯浅町
㉟昆布〈おきな昆布〉大阪市中央区心斎橋
㊱京菓子〈亀屋良吉〉京都市下京区四条醒ヶ井
㊲和菓子〈虎屋〉東京都港区赤坂
㊳輪島塗〈稲忠漆芸堂〉石川県輪島市河合町
㊴薬舗〈井上薬房〉京都市中京区麩屋町通
㊵羽二重餅〈甘泉堂〉福井市中央１丁目
㊶焼塩〈ミヤザキ食塩〉兵庫県赤穂市加里屋
㊷銘園〈千茶荘〉広島市西区商工センター
㊸お茶〈福寿園〉京都府相楽郡山城町
㊹利久弁当〈志る幸〉京都市中京区河原町四条
㊺和菓子〈越後製菓〉新潟県長岡市呉服町
㊻そばぼうろ・おかき〈忠兵衛〉大阪市西区新町
㊼加賀友禅〈ゑり虎〉石川県金沢市片町
㊽酒饅頭〈喜八州〉大阪市北区梅田
㊾京呉服〈松本〉東京都中央区日本橋室町
㊿和菓子〈笹屋伊織〉京都市南区七条大宮
(51)古美術〈丹波屋〉京都市左京区聖護院山王町
(52)栗菓子〈小布施堂〉長野県上高井郡小布施
(53)京呉服〈千總〉京都市中京区三条通烏丸
(54)塩味饅頭〈播磨屋利久〉兵庫県赤穂市尾崎
(55)日本酒〈千福酒造〉広島県呉市本通
(56)タケノコ料理〈錦水亭〉京都府長岡天神
(57)京五色豆〈豆政〉京都市中京区夷川通柳馬場
(58)民宿〈とト屋〉京都府竹野郡丹後町
(59)保健産業〈森下仁丹〉大阪市東区玉造
(60)とんかつレストラン〈政かつ〉岐阜県高山市上一之町

㊶日本酒《剣菱》兵庫県神戸市東灘区深江浜町
㊷粟おこし《津の清》大阪市南区二ツ井戸町
㊸和菓子《梅屋常三郎》石川県七尾市作事町
㊹お食事処《つるつる庵》大阪市北区梅田
㊺結納品《寿屋》大阪府岸和田市五軒家町
㊻和菓子《鶴屋八幡》大阪市東区今橋
㊼すし《魚喜ずし》和歌山市南樋屋町
㊽うどん・そば《みくに庵》大阪府堺市三国ヶ丘町
㊾京料理《湖月荘》京都市東山区丸太町通
㊿創作和菓子《むか新》大阪府岸和田市上町
(71)和菓子《庵月》大阪市中央区心斎橋筋
(72)かやくごはん《だるま》大阪市中央区千日前
(73)そば《富士蕎麦》東京都千代田区神田
(74)地ビールレストラン《野半の里》和歌山県伊都郡葛城町
(75)料亭《富美代》京都市東山区八坂新地末吉町
(76)料亭《河文》名古屋市中区丸の内
(77)日本酒《辰馬本家酒造》兵庫県西宮市鞍掛町
(78)ふぐ料理《太政》大阪市中央区日本橋
(79)染織《ひごや》京都市上京区西陣
(80)京料理《玉の家》京都市東山区下河原町八坂
(81)不動産《鴻池組》大阪市中央区北久宝寺町
(82)焼肉《なにわ亭》京都府八幡市八幡柿ヶ谷
(83)活魚・割烹・すし《生駒亭・白雲》大阪市淀川区西中島
(84)旅館《丸世井》兵庫県城崎郡香住町
(85)うどん《林屋》高知県琴平町
(86)割烹《高野》大阪府富田林市錦織

87割烹《輪一》和歌山市吉田南
88仏壇《シメノ》大阪府岸和田市駅前
89割烹旅館《京富》奈良県大和郡山市東岡町
90不動産《住友林業》大阪市中央区城見
91すし・会席料理《きた寿し》大阪府堺市庭代台
92製薬《シオノギ》大阪市中央区道修町
93創作陶器《すず信》福島県会津若松市大町
94料亭《輪違屋》京都市下京区島原仲之町
95和菓子《紫舟小出》石川県金沢市横川
96加賀らくがん《諸江屋》石川県金沢市野町
97和菓子《鶴屋吉信》京都市上京区今出川通
98建設《三井建設》東京都千代田区大平町
99百貨店《松坂屋》名古屋市中区栄
100うどん・そば《みよし楼》大阪狭山市半田
101京呉服《千切屋》京都市中京区高倉通三条
102うどん・そば《馬次》和歌山市県庁前
103旅館《守源》京都府竹野郡網野町
104料亭《菊水楼》奈良市餅飯殿町一の鳥居前
105割烹《桔梗庵》大阪府岸和田市宮本町